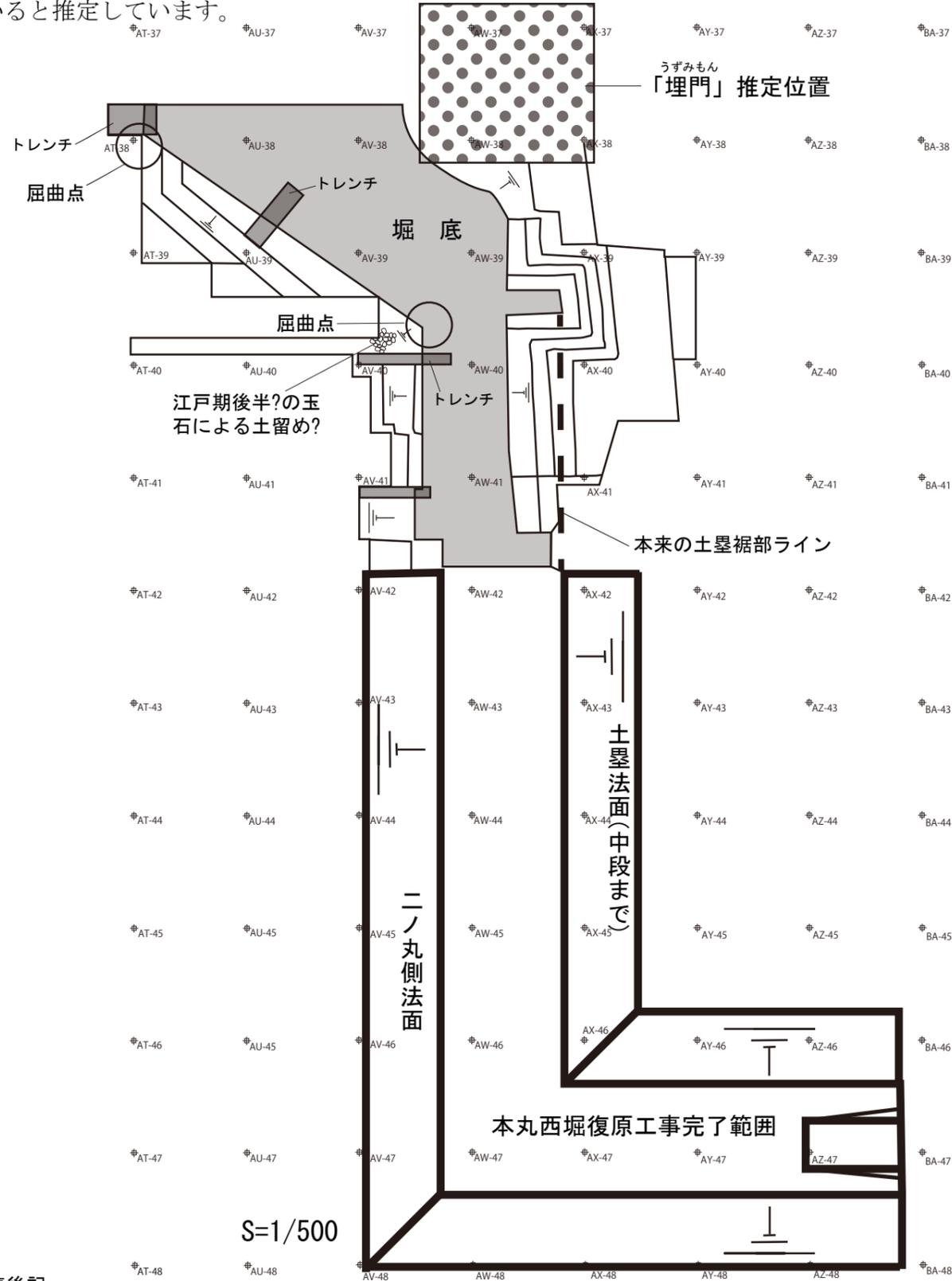


3 本丸西堀跡・西土塁跡（屈曲部）調査

本丸西堀跡・西土塁跡の調査は、平成24年度に継続する堀の中位エリアで、絵図では堀の屈曲部と「埋門(うずみもん)」の位置に相当します。今年度の調査では、二ノ丸側の堀の法面屈曲部が検出されました。ちょうど「二ノ丸西不明門」へつづく園路の真下で屈曲していました。埋門側は盛土に相当する「黄褐色砂礫層」の範囲が検出されました。現時点では平面遺構は認められず、削平を受けていると推定しています。



史跡山形城跡(2013~2014) 本丸御殿跡・西堀跡発掘調査現地説明会資料

平成26年11月15日(土) 山形市教育委員会社会教育青少年課

調査要項

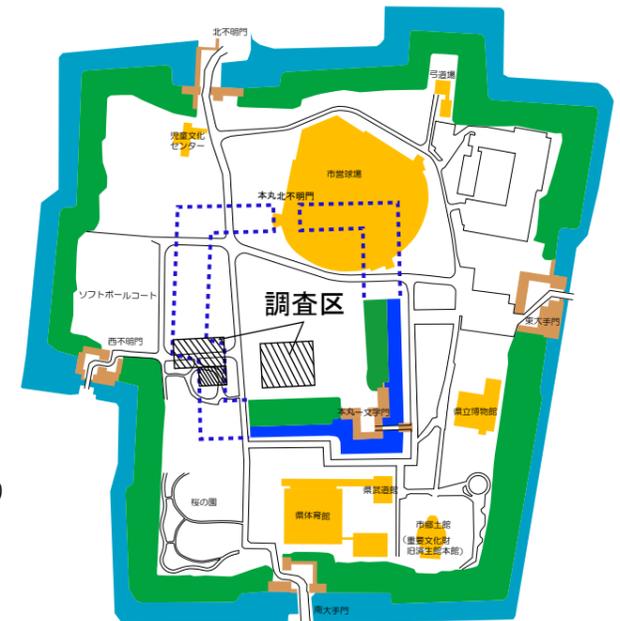
遺跡名	国指定史跡 山形城跡
所在地	山形市霞城町(霞城公園)
遺跡番号	1番(山形県遺跡地図)
調査期間	平成25年5月28日~12月18日、平成26年4月15日~12月26日(予定)
調査面積	本丸御殿跡 約1,000㎡(平成25年度実施範囲)+800㎡(説明会開催対象) 本丸西堀・西土塁跡 約1,000㎡
調査原因	史跡山形城跡(霞城公園)本丸西堀整備事業(文化庁補助事業)
遺跡種別	城郭(近世城郭)
時代	近世・近現代
遺構	溝跡・土坑・大型土坑・ピット・石列遺構 など
遺物	陶磁器碗皿類・土師質土器・木製品・金属製品・古銭・石製品 など
調査事業の主体	山形市公園緑地課
調査実施の機関	山形市教育委員会
調査担当	山形市教育委員会 社会教育青少年課

1 概要(史跡の立地及び周辺の環境)

山形城跡は、最上義光が整備したといわれる本丸・二ノ丸・三ノ丸からなる平城です。現在、二ノ丸から内側は霞城公園として憩いの場となっていますが、昭和61年国史跡指定を受けて以来整備が進められ、二ノ丸東大手門や本丸一文字門石垣などが復原され新たなシンボルとなっています。整備は引き続き行われ、平成23年度より「本丸西堀・西土塁跡」の調査を文化庁の補助をうけて行っています。また、平成24年度より「本丸御殿跡」の整備を目的とした発掘調査を同補助により実施しており、西堀。西土塁跡と並行して調査を行っております。

城跡の周囲は市街地となっており、ほぼその中心に位置します。市街北部を流れる馬見ヶ崎川による扇状地上に立地し、本丸一文字門付近で海拔約130mを測り湧水地帯に築かれた平城であったと考えられます。

本丸御殿跡周辺は明治時代の改変により御殿に伴う遺構は消滅しており、地下遺構の調査が重要と考えております。



歴代藩主年表

明治二年	弘化二年	明和四年	明和元年	延享三年	元禄十三年	元禄五年	貞享三年	貞享二年	寛文八年	慶安元年	正保元年	寛永二十年	寛永十三年	元和八年	慶長五年	延文元年	和暦											
一八六九	一八四五	一七六七	一七六四	一七四六	一七〇〇	一六九二	一六八六	一六八五	一六七八	一六四八	一六四四	一六四三	一六三六	一六二二	一六〇〇	一三五六	西暦											
水野忠弘	水野忠精	秋元志朝	秋元久朝	秋元永朝	秋元涼朝	幕府領	(大給)松平乗佑	堀田正亮	堀田正春	堀田正虎	(奥平)松平忠雅	(奥平)松平忠弘	(結城)松平直矩	堀田正仲	奥平昌章	奥平昌能	(奥平)松平忠弘	(結城)松平直基	幕府領	保科正之	鳥居忠恒	鳥居忠政	最上家信(義俊)	最上家親	最上義光	斯波兼頼	藩主	
五万石		六万石					六万石	一〇万石	一〇万石	一〇万石	九万石	十五万石	十五万石	二十万石	二十万石	二十万石	二十七万石	五十七万石										石高

編集後記

現地説明会開催に当たり関係各位に多大なご理解・ご協力を賜りましたこと誠に感謝申し上げます。尚、山形城跡の復原事業にかかわり山形市では関連する資料を探しています。お心当たりの方は下記までご連絡下さいませようお願いします。

【お問い合わせ先】〒990-8540 山形県山形市旅籠町二丁目3番25号 山形市まちづくり推進部公園緑地課 TEL023(641)1212代

【編集・発行】山形市教育委員会社会教育青少年課文化財保護係 平成26年11月15日(土曜日)

2 本丸御殿跡調査区の遺構と遺物

(1) 遺構配置の現状

近現代のカクラン：調査区の中央に円弧を描く幅約5mのカクラン溝を検出（SD02018）しました。また北東隅にも南端部円弧を呈するカクランがあり、両者は旧野球場のカクランと推定されます。

大型土坑：BF-40を中心としてやや長楕円の土坑を検出しました。深さは、確認面から3m以上（底面未到達）。井戸跡を想定しましたが確認できませんでした。位置からやや南側によっているため、井戸ではない可能性が高いと思われます。

火災土坑（瓦廃棄土坑）：BG-39・40グリッドで検出。直径約2.8mで、焼土と黒瓦が集中して出土しました。金箔押宝珠文軒平瓦の出土が特徴です。

【最上氏時代の遺構群】

石列・石積遺構：下層より河川玉石による石列及び石積遺構が9基検出されました。建築物の基礎の可能性が高いと推測されます。

焼土層分布（図中参照）：調査区西側に広く分布します。同層中より黒瓦（焼けて褐色変色瓦も含む）のみ出土します。金箔瓦が数点出土しています。焼土は、石列と同時期のものですが、瓦とともに2次的に捨てられた土砂の可能性が高いと考えられます。

また、BE-39より障子襖戸の取手金具（銅製）が出土した。

黄褐色砂層分布（図中参照）：調査区西側に広く分布します。石列・焼土分布層を被うように堆積します。地山黄褐色砂粒を主体としますが、黒褐色土との混合土であり、人為的な盛土であることがわかりました。この砂は地面を深く掘り下げて初めて検出される土砂です。したがって、この地層の分布は結果として周囲に深い「堀」などに相当する遺構の所在と、その土砂による「土塁」状の盛土を想定させます。

調査区西側には、平成18・19年度に調査した建物跡配置区域があり、一部に深い「掘り込み」が認められました。関連性がうかがわれます。

